様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５７００１７

研究課題名（和文）英領西インド諸島・クリオールたちの「植民地責任」

研究課題名（英文）The Creole Women's Responsibility for Decolonisation in the British West Indies

研究代表者
堀内　真由美（HORIUCHI, MAYUMI）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０４４９８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「支配した側」に置かれた女性が「支配された側」に対する「植民地責任」をどのように、どこまで認識できたか、そして、それを広く発信し共有できたかを考察することにあった。３か年の研究をとおして、旧英領西インド・ドミニカ島出身の英系白人（クリオール）女性、ジーン・リースとフィリス・オーフリーの生涯と文芸作品を取り上げ、同時代の政治的・文化的状況を示す多様な資料とともに考察することで、故郷への愛着と、本国イギリスとイギリス人への懐疑的姿勢を明らかにできた。脱植民地に向かう過程で、彼女たちの「西インド人」としての自己認識が、島民とのあいだに齟齬を生み出すようになっていった状況も解明できた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to find out how the Creole women born in the British West Indies would recognise their responsibility for the colonisation and decolonisation in their home island.
I made a focus mainly on the two Creole women, such as Jean Rhys(1890-1979) and Phyllis Allfrey (1908-1986), and examined their written works including a lot of unknown short stories and well known novels.
With a number of other written materials, such as newpaper articles and the governmental papers both in the UK and the Commonwealth of Dominica, I was able to make it clear that the two women were forced to have complicated state of mind towards the decolonisation in their home island while they had strong sympathy for 'their people' who once supported their lives as servants and labourers.

研究分野：ジェンダー論、ポストコロニアル

キーワード：ジェンダー　ポストコロニアル　植民地責任　英領西インド　英連邦ドミニカ　クリオール女性　ジーン・リース　フィリス・オーフリー

１．研究開始当初の背景

最近の東アジア諸国間の「緊張関係」をまえにして、かつての支配―被支配関係の根本的な「清算」のための努力を、国家間だけでなく、個々人のレベルにおいても行なえないかと考えたのが、研究開始当時の社会背景と問題意識であった。その際、永原陽子ら日本の歴史家たちが提唱した「植民地責任」という概念を議論の枠組みとして援用し（永原『「植民地責任」論』、2009 年、青木書店）、従来の戦争責任論ではカバーしえない、過去から「現在」の関係性にも注目できる議論の幅を、今回の研究における考察に用いることとした。

２．研究の目的

研究開始当初の問題意識から、研究を行なう先に、かつて支配した側に属する個々人が「植民地責任」について思考し、発信し、それを共有していくためのきっかけとなる議論形成を目的とした。

さらに、従来の植民地支配の歴史叙述のなかでは、「被害者」と認識されることの多かった女性というジェンダーに焦点を当て、脱植民地過程において、「支配した側」に置かれた女性たちの行動と、それが与えた社会的影響に注目することも目的とした。

３．研究の方法

主として文献調査による、過去の「植民地責任」と個々人との関係性を考察することが、本研究における方法となった。

具体的には、今回の課題のために、旧英領西インド植民地と旧宗主国であるイギリスとの間で、「支配した側」に属する女性に焦点を当てるため、その具体的考察対象を慎重に選定した。

(1)調査対象地域における人物の選定

本研究の目的に迫るため、英領西インド諸島ドミニカ島（現英連邦ドミニカ）出身である英系白人（クリオール）女性で、欧米にも知られた作家のジーン・リース（1890-1979）と、同じく作家でもあり、また短命に終わった西インド連邦（1958-62）で唯一の白人、唯一の女性閣僚を務めたフィリス・オーフリー（1908-1986）の生涯と作品、エッセイ、書評、インタヴューなどを、可能な限り網羅的に、イギリスとドミニカでの調査で収集した。

(2)資料収集における対象時期（時代）

西インド諸島が労働運動や自治権要求運動にまい進した 1920 年代から 30 年代、そして 50 年代における西インド連邦成立前後の時代状況を詳しく知る必要から、（旧）植民地省をはじめとする関係機関に所蔵された公文書なども参考にした。「本国」と植民地との関係を公文書から探ると同時に、脱植民地に向かうドミニカに対する、かつての支配層である二人のクリオール女性＝「支配された人々と対峙する者」の、同時代における感情を、彼女たち自身が書いた「作品」から読み解くことに集中した。

４．研究成果

３年間の研究をとおして、旧英領西インド植民地ドミニカ島出身の２人のクリオール女性、作家ジーン・リースと同じく作家で政治家のフィリス・オーフリーが、故郷の脱植民地過程で果たそうとした「責任」の一端が明らかになった。

彼女らの書き残した長編・短編小説や書簡、インタヴュー、エッセイおよび同時代の新聞記事などを精査した結果、リースとオーフリーでは、「滅びゆく白人支配層に属する者」という自己認識はあるものの、故郷の脱植民地過程における関わり方や心情には、大きな差異があった。

(1)リース・オーフリーの共通点

両者とも十代の後半に島を出ていることでは共通しており、40 歳代後半まで、本国イギリスを含めた複数の国と地域を移動しながら、その都度、自己のアイデンティティを模索していった形跡が認められた。またリースは 1936 年に一度、オーフリーは二度、そして三度目はその後亡くなるまで、それぞれ帰郷を果たしている。今回の研究では、彼女らの個人史もさることながら、帰郷で何を見、何を認識したか、またその時点での年齢と人生経験とが、故郷の脱植民地化に対する姿勢を決定づけたという発見があった。

両者とも 1930 年代という、ドミニカのみならず、英領西インド植民地が労働運動と自治権要求運動に揺れた時期に、リースは 40 歳代半ばで、オーフリーは 20 歳代はじめに帰郷している。そのとき見たと思われる、歴史研究から明らかな「故郷の場面」とは、例えば、非白人による議会の民主化要求や、「カラード」と呼ばれたアフリカ系と白人との混血の人々が、商工業活動をとおして経済力をつけていった一方で、農業を中心とした第一次産業の斜陽により、白人地主層の没落が顕著になっていたというものだった。

(2)両者における相違点

ほぼ同時期の帰郷に際して、リースは「奴隷主のひ孫」という「歴史的負い目」と躍進する「カラード」への嫌悪感から、数々の作品のモチーフを得るが、そこには、このような狭い島に没落しつつも支配層として敵視される存在を作り出した本国と、過去に無関

心な本国人への「告発」を多くの作品を通して発表している。だが、残念なことに、リースのこれまでの「文学評論」に、この点に関する議論はほとんどないのが現状である。本研究の期間中に発表したリースに関する論文は、そのような従来のリース評に新たな視点を提供できたと考えている。

他方、オーフリーも、一度目の帰郷で最も強烈な印象を抱いたのが、「支配層の交代」という「風景」だった。ただし、オーフリーは「カラード」への反感をバネに、その後「理想的白人」として、どのように故郷の脱植民地化に参画していくかを深く追求するようになる。大戦間期と戦後を含む 17 年におよぶ本国での「政治修行」のなかで、西インド植民地の政治リーダーとも交流したオーフリーは、戦後イギリス労働党内で議員秘書や西インド独立支援の委員として活動し、来たるべき帰郷とその後の自分の取るべき政治姿勢や方法をじっくり準備した。だが、オーフリーの故郷での政治活動は、60 年代初頭、島々を席巻した「ブラック・パワー」の前に頓挫する。かつて彼女を支持した人々から「白人」という属性のみで認識され、彼女の政治理念を共有してもらうことが困難になった。本研究中に発表したオーフリー関係論文では、日本のみならず欧米でもほとんど知名度のない彼女の生涯と政治活動を中心に、「人種とジェンダー」を超えようと試みたオーフリーの西インド再生への理念の内容と、それが結果的には多くの「同胞」の共感を得られなかった原因を提示できたと考えている。

(3)今後の課題

３か年の研究からは、リース、オーフリーとも、過去の歴史と現在の課題の克服に対する両者の認識は明らかになった。しかし、リースの作品には、まだまだ分析できなかったものも多く、またオーフリーに関しても、故郷での政治生命が絶たれたあと、70 年代終わりのドミニカ独立までの期間で、どのような政治的主張をし、それが島内の人々にどのような影響を与えたのかを分析することが課題として残った。

今後は、50 年代末から活発化する英領植民地における独立運動のなかで、本国イギリスが西インド植民地に対してどのような姿勢を示したのか、そして、その情報に対して、本国に留まったリースと、西インド連邦を含む、カリブ海に留まったオーフリーが、どう反応したのか、双方向からの「植民地責任」を考察し、その結果を明らかにしたい。そのことは、現在のところ、旧英領植民地の脱植民地化に関する議論で、ほとんど注目されずにいた西インド諸島の事情を、「植民地責任」という切り口で、学会を含め広く社会に知らしめる結果に結びつくものと考える。

東アジアにおける植民地支配の歴史がいまだ終わっておらず、歴史を再発見し、発信し、議論することが、「緊張」をほぐすための手段となることを、「個々人の「植民地責任」」をキーワードとして、社会に喚起できるような研究成果を得るよう努力していく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

①<u>堀内真由美</u>

「「サフラジェット」の記憶を読む―ジーン・リース初期と後期の２作品から」、『パブリック・ヒストリー』第 14 号、17-32 頁、2017 年２月、大阪大学西洋史学研究室。（査読有）

②<u>堀内真由美</u>

「クリオール女性の脱植民地理念をめぐる困難―フィリス・Ｓ・オーフリーと英領西インド植民地」、『愛知教育大学研究報告』第 65 輯（人文・社会科学編）、61-69 頁、2016 年３月、愛知教育大学。（査読無）

③<u>堀内真由美</u>

「クリオール女性の脱植民地経験―「西インド連邦」閣僚フィリス・オーフリー」、『女性とジェンダーの歴史』第 3 号、21-31 頁、2015 年 11 月、イギリス女性史研究会。（査読有）

④<u>堀内真由美</u>

「「植民地主義の再発見」―ジーン・リースの描くノッティンヒル「人種暴動」」、『パブリック・ヒストリー』第 12 号、29-45 頁、2014 年２月、大阪大学西洋史学研究室。（査読有）

⑤<u>堀内真由美</u>

「英領西インド・白人クリオールの「植民地責任」―ジーン・リースと作品から」、『愛知教育大学研究報告』第 63 輯（人文・社会科学編）、73-81 頁、2014 年３月、愛知教育大学。（査読無）

〔学会発表〕（計　３　件）

①<u>堀内真由美</u>

「20 世紀前半クリオール女性の移動と自己認識の変化―ジーン・リースとフィリス・オーフリーを例として」、大阪大学文学研究科共同研究採択事業「近代における女性を中心とした「移動/異動」の力学とその表象」報告会、2017 年３月４日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）

②<u>堀内真由美</u>

「クリオール女性の脱植民地経験―「西イ

ンド連邦」閣僚フィリス・オーフリー」、日本女性学研究会、近代女性史分科会例会、2016 年 3 月 19 日、京都市男女共同参画センター（京都府京都市）

③堀内真由美
「「植民地主義の再発見」―ジーン・リースの描くノッティンヒル「人種暴動」」、日本女性学研究会、近代女性史分科会例会、2014 年 11 月 15 日、京都市男女共同参画センター（京都府京都市）

６．研究組織
(1)研究代表者
堀内 真由美（HORIUCHI, MAYUMI）
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60449832